

4 K-9

通信サービス記述のための知識と動作に基づく様相論理 SSL

梶崎修二, 堀田英一

NTTソフトウェア研究所

1 はじめに

従来の通信サービスはその実現にどのような機能を必要とするかという観点から分類され、論じられることが多かった。しかし、サービスが多様化した現在、どのようなサービスがユーザの要求に答えられるのか、何をユーザは欲しているのかなどを記述し、論じる手段が望まれる。

そこで、ユーザの要求(抽象サービス仕様)は何かを形式的に記述し実際のサービスと要求との間を関係付ける手段として、並行プロセスの知識所有状態を記述する様相論理 SSL(Service Specification Logic)を提案する。これにより、通信サービスに対する仕様をユーザの知識所有状態の変更過程として捉えることができ、サービス仕様の形式的記述・分類・model checkingなどが可能になることを示す。

2 知識と動作に注目した様相論理:SSL

SSLは、並行プロセス記述のための様相論理であるプロセス論理[1]に logics of common knowledge(LCK)[2]を付加した様相論理体系である。

2.1 構文

$\Phi$  を原子式の集合、 $A$  をアクションの集合、 $I$  をエージェントの集合とする。 $(\Phi, A, I)$  に基づく SSL 式の集合  $(\phi \in) \mathcal{L}_{SSL}(\Phi, A, I)$  を次の BNF により定義する。

$$\phi ::= p \mid \neg\phi \mid (\phi_1 \wedge \phi_2) \mid \exists x.\phi \mid \langle \alpha \rangle \phi \mid \langle \cdot \rangle^* \phi \mid K_i \phi \mid E_g^n \phi \mid C_g \phi$$

ここで、 $p \in \Phi$ ,  $\alpha \in A \cup AVar$ ,  $i \in I$ ,  $g \in \wp(I)$ ,  $x \in AVar$ ,  $n \geq 1$  である ( $\wp(S)$  は集合  $S$  の冪集合を表す)。 $\langle \cdot \rangle^*$  はプロセス論理の様相オペレータであり、 $K, E^n, C$  は LCK のそれである。

記述の簡易化のため、 $\vee, \rightarrow$  を導入する。また、 $[a]\phi = \neg \langle a \rangle \neg \phi$  とし、 $[\cdot]^* \phi = \neg \langle \cdot \rangle^* \neg \phi$  とする。

2.2 意味論

各エージェントに対応する状態遷移システムを並行合成した状態遷移システムを下式で表す。

$$T = \langle S, S^0, \Phi, A, (\xrightarrow{\alpha})_{\alpha \in A}, \pi \rangle$$

ここで、 $S \subseteq \prod_{i \in I} S_i$  は各エージェントの状態(局所状態)  $S_i$  のタプル(大域状態)の集合、 $S^0 \subseteq S$  は初期状態の集合、 $\xrightarrow{\alpha} = \{(s_1, s_2) \in S \times S \mid s_1 \xrightarrow{\alpha} s_2\}$  は状態遷移を表す二項関係、 $\pi: S \times \Phi \rightarrow \{true, false\}$  は各状態での原子式の値の割り当てである。

状態遷移システム  $T$  を定めると、システムの動作履歴をアクションと大域状態のタプルの列として表すことができる。そこで履歴  $h$  の集合を  $H(T) \subseteq (A \times S)^*$  で表す。

次に、SSL に対する (Kripke) 構造  $\mathcal{M}$  を以下のように定め、SSL 構造と呼ぶことにする。

$$\mathcal{M} = \langle T, (\mathcal{K}_i)_{i \in I} \rangle$$

ここで  $\mathcal{K}_i \subseteq H(T) \times H(T)$  はエージェント  $i$  から見た履歴の等価関係である、すなわち、 $h_1 \mathcal{K}_i h_2$  ならば、エージェント  $i$  は履歴  $h_1$  と  $h_2$  を区別することはできない。

以上の準備の基で、各式の意味を以下のように定める。

$$\langle \mathcal{M}, h \rangle \models \phi \iff \pi(\text{stat}(\text{lst}(h)), \phi) = true \quad \phi \in \Phi \text{ の時}$$

stat は遷移システムの大域状態を返す関数であり、lst は列中の最後の要素を返す関数である。

$$\langle \mathcal{M}, h \rangle \models \neg\phi \iff \langle \mathcal{M}, h \rangle \not\models \phi$$

$$\langle \mathcal{M}, h \rangle \models (\phi \wedge \psi) \iff \langle \mathcal{M}, h \rangle \models \phi \wedge \langle \mathcal{M}, h \rangle \models \psi$$

$$\langle \mathcal{M}, h \rangle \models \langle \alpha \rangle \phi \iff \exists s \in S. [\text{stat}(\text{lst}(h)) \xrightarrow{\alpha} s \wedge \langle \mathcal{M}, h \cdot \langle \alpha, s \rangle \rangle \models \phi]$$

$\cdot$  は列の結合関数とする。

$$\langle \mathcal{M}, h \rangle \models \exists x.\phi \iff \exists \alpha \in A. \langle \mathcal{M}, h \rangle \models \phi[\alpha/x]$$

$$\langle \mathcal{M}, h \rangle \models \langle \cdot \rangle^* \phi \iff \exists h' \in H(T). [h \preceq_p h' \wedge \langle \mathcal{M}, h' \rangle \models \phi]$$

$$\preceq_p = \{(h, h') \mid \text{lgt}(h) \leq \text{lgt}(h') \wedge h = h' \uparrow \text{lgt}(h)\}$$

lgt( $s$ ) は列  $s$  の長さ。また  $\uparrow^D$  は関数  $f$  の定義域を  $D$  に制限したものである。自然数はそれより小さいものの集合と同一視される。

$$\langle \mathcal{M}, h \rangle \models K_i \phi \iff \forall h' \in H(T). [h \mathcal{K}_i h' \rightarrow \langle \mathcal{M}, h' \rangle \models \phi]$$

$$\langle \mathcal{M}, h \rangle \models E_g^1 \phi \iff \forall i \in g. \langle \mathcal{M}, h \rangle \models K_i \phi$$

$$\langle \mathcal{M}, h \rangle \models E_g^n \phi \iff E_g^1 E_g^{n-1} \phi \quad n \geq 2$$

$$\langle \mathcal{M}, h \rangle \models C_g \phi \iff \forall k \in \omega. \langle \mathcal{M}, h \rangle \models E_g^k \phi$$

$$\mathcal{M} \models \phi \iff \forall s \in S^0. \langle \mathcal{M}, \langle \iota, s \rangle \rangle \models \phi$$

$\iota$  は初期状態に至る仮想的なアクションを表す。

履歴  $h$  の最後の状態で  $\phi$  が成立する時に  $\langle \mathcal{M}, h \rangle \models \phi$  が成立する。直観的には、 $\langle a \rangle \phi$  はアクション  $a$  の後には  $\phi$  が成り立つ可能性があることを意味し、 $K_i \phi$  はエージェント  $i$  が  $\phi$  を知っていることを、 $C_g \phi$  は「グループ  $g$  は  $\phi$  をお互い知っていることをお互い知っていることを…」を意味する。

### 3 SSLによる通信サービスの検証・分類

model checking とは SSL 構造上である式が成り立つかどうかを検証することをいう。すなわち、抽象サービス仕様  $\phi$  に対し、 $M \models \phi$  が成立するならば、SSL 構造  $M$  はその仕様  $\phi$  の一つの実現 (モデル) であり、 $M$  が要求  $\phi$  を満たすかどうかの検証となっている。ここで、抽象サービス仕様とは、SSL 式のうち具体的なアクション名を含まないものとする。

また、適当な抽象サービス仕様を定め、model checking によって SSL 構造の集合を分割することにより、SSL 構造の分類が可能となる。

以下に抽象サービス仕様の例を示す。また、 $\text{has}(r, \text{info}) \in \Phi$  は受け手  $r$  が情報  $\text{info}$  を持っていることを表す原子式である。

$[.]^*(.)^* \text{has}(r, \text{info})$

どのようなアクション列を実行しても、必ずいつかは受け手  $r$  は情報  $\text{info}$  を持っている (知っている)。

$\exists x. ((.)^*(x) \text{true} \wedge [.]^*[x] C_{\{s,r\}} \text{has}(r, \text{info}))$

あるアクション  $x$  は実行可能であり、実行後には情報  $\text{info}$  を受け手が知っていることがいつでも送り手  $s$  と受け手  $r$  との間の共通知識となっている。

SSL の model checking を機械的に行なうため、有限の遷移システムを対象とした model checker を計算機上に実現した。これを用いた通信サービスへの適用例を以下に示す。ここで  $K_i$  を個々の遷移システムに対して以下のように定めることにする。これは各エージェントは観測可能なアクションに関して完全な記憶を持つことを意味する。

$$K_i = \{(h_1, h_2) \mid \rho_i(h_1) = \rho_i(h_2)\}$$

$$\rho_i(h) = \text{sqsh}(\langle \langle \text{act}(h(j)), \text{stat}(h(j))(i) \rangle \rangle_{j \in \text{vis}(h,i)})$$

上式中、 $\text{sqsh}$  は列を作る関数であり、関数  $f$  の定義域が  $\{i_0, i_1, \dots, i_n\} \subseteq \omega$ 、(但し  $i_0 < i_1 < \dots < i_n$ ) である時、 $\text{sqsh}(f) = \langle f(i_0), f(i_1), \dots, f(i_n) \rangle$  である。 $\text{act}(t)$  はタプル  $t$  の第一要素、 $\text{vis}(h, i) = \{j \in \text{lgt}(h) \mid \text{act}(h(j)) \in A_i \cup \{i\}\}$  である。

通信サービスの実現に相当する状態遷移システム  $T$  を決めるとそれに応じて  $(K_i)_{i \in I}$  が具体的に決まるので、 $M = \langle T, (K_i)_{i \in I} \rangle$  が一意に決定される。すなわち、model checking による SSL 構造の分類は遷移システム (通信システム) の分類となる。

**POTS** POTS<sup>1</sup> を実現する状態遷移システム  $T$  を、図1のように与える (ただし、受け手のみを示す)。この時、SSL 構造は以下のような性質を持つ。

$[.]^*(.)^* \text{has}(r, \text{info})$  不成立

必ずしも情報は伝達されない (相手が不在・会話中)。

$\exists x. ((.)^*(x) \text{true} \wedge [.]^*[x] C_{\{s,r\}} \text{has}(r, \text{info}))$  成立

**FAX** POTS との違いは、送信を行っても受け手が受けとったかどうかの確認が出来ないことである (図2)。

$\exists x. ((.)^*(x) \text{true} \wedge [.]^*[x] C_{\{s,r\}} \text{has}(r, \text{info}))$  不成立

受け手が情報を所有しても送り手はその事を知ることができない。

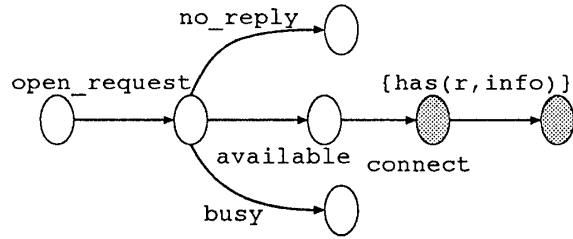


図1: POTS の遷移図

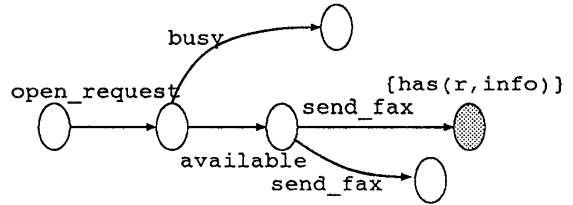


図2: FAX の遷移図

**到着通知付き FAX** 先の FAX の欠点を除くために、POTS と組み合わせることを考える。すなわち、情報が正しく伝わった場合、受け手は POTS により返事を返すようにする。この時、

$\exists x. ((.)^*(x) \text{true} \wedge [.]^*[x] C_{\{s,r\}} \text{has}(r, \text{info}))$  成立

到着通知を行なうアクションが  $x$  に相当する。

となる。これより、POTS と FAX を組み合わせた到着通知付き FAX は共通知識を達成出来るという意味で、POTS と同じ範疇に入ることが分かる。

### 4 結論

本稿では様相論理 SSL を提案し、これによりユーザ要求の記述や検証、分類ができることを示した。

現在は例にあげた程度のサービスについての分類しか行っていないため、例えば CLASS 系サービスの分類を行ない、SSL の有効性を確かめていく予定である。しかし、現在の model checker は対象遷移システムを履歴の集合が有限なものに限っている。実際には有限状態システムに対して、任意の  $\phi \in \mathcal{L}_{SSL}$  の真偽を決定することが可能である。そこで、この制約を取り除き対象範囲を広げることが必要と思われる。

また、本稿では SSL の言語および意味論を提示した。しかし、厳密な意味で SSL を論理と呼ぶには、この言語に基づく演繹体系を定めることが必要である。そこで、それを定め、その体系の中で証明される含意関係を用いて抽象サービス仕様の階層化を行なうことを考えている。

### 参考文献

[1] Milner, R.: *Communication and Concurrency*, Prentice-Hall International, 1985.  
 [2] Halpern, J.Y.: "Knowledge and Common Knowledge in a Distributed Environment", *Journal of the ACM*, Vol.37, No.3, July 1990, pp.549-587.

<sup>1</sup> 通常の電話サービス